私はウサギ

千野姉妹のルナティックな毎日

ひかわ玲子
Reiko HIKAWA

中央公論社

私はウサ

千野姉妹のルナティックな毎

かわ玲

私はウサギ　千野姉妹のルナティックな毎日

一九九五年　九　月三〇日初版印刷
一九九五年一〇月　七　日初版発行

著　者　ひかわ玲子
発行者　嶋中行雄
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二－八－七
電話　販売部〇三(三五六二)一四三一
編集部〇三(三五六二)三六六四
振替　〇〇一二〇－四－三四

印　刷　大日本印刷
製　本　大日本印刷

Printed in Japan ©1995 CHUOKORON-SHA,INC.
Reiko HIKAWA
ISBN4-12-002486-5　C0093
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

目　次

私はウサギ　5
千野姉妹のルナティックな毎日　1

星に願いを　43
千野姉妹のルナティックな毎日　2

太陽がいっぱい　75
千野姉妹のルナティックな毎日　3

伊達な紳士にご用心　107
千野姉妹のルナティックな毎日　4

ある晴れた夜には永遠が見える　141
千野姉妹のルナティックな毎日　5

装画　伊藤正道
装幀　大向　務
（株式会社アノン）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私はウサギ

千野姉妹のルナティックな毎日

私はウサギ

千野姉妹のルナティックな毎日　1

1

昼下がり。

（三階の――304号室、だったよな、確か……）

両手に抱えているのは、洗剤の箱二箱にタオル二枚。そう、彼は新聞の勧誘員だった。

三週間ほど前に、このマンションで引越しがあり、それまで住んでいた家族が出ていった。そこに、先週の土・日曜で新しい住民が移り住んできた、と聞いたのだ。

3LDK、家賃も十三万円台のこの賃貸マンションは、大体、二人目の子どもが生まれたくらいの若夫婦が住み、そうした家はまあ、新聞を取ってくれる。

エレベーターは三階で止まり、彼は勧誘を成功させようと気合いを入れ、足取りも軽く、目指す家へと通路を渡っていった。

ダンボール箱が玄関の前に出ている家がある。

（……あそこかな？）

どうやら、そのダンボール箱をストッパーがわりにして、玄関の扉が開いているようだ。

（ラッキー！）

扉を開いてもらう手間が省けるってもんだ。

近付くにつれ、若い女の声とおぼしき、かん高いわめき声が聞こえてきた。

「――どうして……っ！……」

どうも、夫婦喧嘩……というのではないようだ。言い争っているらしいが、そのどちらもが女の声だ。

彼はダンボール箱の脇に立つと、ひょいとその家の表札を仰ぎ見た。

もう、新しい表札がついている。

『304号／千野月見子
星見子
陽見子』

珍しい名前だな、と、まず思う。

（三姉妹かな？……この名前、なんて読むのかな？）

家の中から、言い争う声がはっきりと彼の耳に聞こえてきた。

「どうして、お姉ちゃん！　ここは、居間でしょ？　みんなの共有部屋なのに、どうしてお姉ちゃんの化粧箪笥が、こう、どん、と置かれちゃうわけ？　きのう、そこに陽見子（ひみこ）が本棚を置こうとしたら、ダメだって言ったの、お姉ちゃんじゃないっ！」

「うるさいわね、あんたは！　少しぐらい、いいじゃないの！　前の家と違って、ここは狭いんだし、それぐらいのことでがたがた文句を言わないでちょうだいっ。しょうがないでしょ！」

「月見（つきみ）お姉ちゃん、横暴っ！　星見（ほしみ）お姉ちゃんの言う通りだとあたしは思うな」

「あんたは黙ってなさい、陽見子！　そんなこと言ってる暇に、そこの食器、早いところ、全部出して、洗ってちょうだい。食器が全部、食器棚に入れられないと、夕飯が食べられないわよっ！」

「ねぇ、お姉ちゃん。お姉ちゃんがその気なら、あたしだって、天体望遠鏡、こっちに置かせてもらうよ？」

「星見子っ。いい加減にしてちょうだい。あたしはあんたみたいな気楽な女子大生と違うから、休みは今日までしか取れないの。わかる？　今日中に、全部、片付けなきゃ、この騒動で有休はずいぶん使っちゃったし、これ以上は休めないのよ」

「そういうこと言って、ごまかすの？　部屋が狭いのはみんな同じなんだから、お姉ちゃんだって自分のものは自分の部屋にちゃんと収納すべきよ」

「置ききれないんだから、しょうがないじゃないのよ！　あのね、ＯＬはあんたみたいに着たきり雀で会社行くわけにはいかないの。だから、服だってそうそう処分するわけにはいかないのよ。あたしだって、好きで働いてるわけじゃないわ！　あんたたちだって、これからは何かあったらあたしの稼ぎしかアテにならないんだから、少しは遠慮しなさいよねっ。それとも、星見子、あなた、大学やめて、働く？」

「……ねぇ。どうして？　学費は全部納めてあるん

だし、お姉ちゃんの世話になんてなってないのに、あたしたち、どうして今の段階でそこまで言われなきゃならないワケ？　大体、どうしてお姉ちゃんはっ……」

彼は、恐る恐る、玄関から部屋の中を覗き込んだ。

まだ梱包が解かれていないダンボール箱が積み重なっている向こう、ダイニング・ルームとおぼしき広い部屋に、三人ほどの人影が見えた。

ジーンズを穿いたボーイッシュな、いかにも学生風の背の高い美人と、エプロンを付けて長い髪を背中でネットでまとめた、若妻風にも見える娘……そのふたりがどうやら言い争っているようだ。

その手前に、床の上にぺたん、と座って、せっせと開けてあるダンボール箱からティッシュに包まれた茶碗などの食器を出している、どう見ても、まだ高校生くらいの少女がいる。

「あ……あの――」

彼が声をかけると、その少女が気がついて、茶碗を床の上に置くと、玄関の方へと出てきた。

「……はい？」

天然パーマなのか、巻き毛の髪を大きなリボンでくくっている可愛い娘だ。

「その、新聞はどこのを取るか、決めてますか？是非、うちから取ってもらえないかなぁ。お願いしますよ。洗剤、持って来たんすけどぉ」

「あ、新聞の勧誘さん？」

少女は玄関まで来ると、さりげなく、扉を開いたままにするために置いたダンボール箱を中へと引き寄せた。

「……ええと。その。新聞は取ると思うんですけど、どこのを取るのかは姉たちじゃないとわからないんで――」

ちら、と少女は、部屋の中へと視線を走らせた。

どうやら、姉娘たちの口喧嘩はますますエスカレートしていっている様子だ。

「こういう状態なんで。また、二、三日してから来てもらえます？　今、お金も払える状態じゃないし」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「お願いしますよ。洗剤とかタオルとか、必要でしたら、いつでも持ってきますから。お嬢さん、三人ですか？　だったら、洗濯も大変でしょう？　電話していただければすぐに来ますから――」
「え、と。そゆことで。じゃ、また、来て下さい、ごめんなさいねぇ」
ぱたん、とどうやら三姉妹の末娘らしき少女は、玄関の扉を閉めてしまった。
ちぇっ、と男は思う。
しかし、まぁ……確かに、そんな話が出来そうな雰囲気でもなかった。サーモン・ピンクに塗られたステンレスのドアの向こうからは、まだ、女同士のわめき合いが微かに漏れ聞こえてくる。
出直すしかないか、と思う。
（三姉妹……か）
もう一度、表札を見上げる。
（つきみこ、ほしみこ、ひみこ……か。ホント、珍しい名前の姉妹だよな）
偶然だが、読み方を全部、耳で聞いてしまったワケだ。
（結構、美人姉妹だったよな。うん）
これなら、出直してくるのもいいか、とひとりごちつつ、新聞の勧誘員の男は洗剤とタオルを抱えたまま、来た道をUターンしていった。

「陽見子！　一休みしましょう。お紅茶、淹(い)れてちょうだい、お紅茶！」
「はーい」
ぷりぷり怒る月見子の望みを受けて、陽見子は素直に立ち上がった。
長姉の月見子がいかに不機嫌であろうと、次姉の星見子は知らんぷりで涼しい顔である。
すごいなー、星見お姉ちゃん、と陽見子は思う。
陽見子なら、怒り荒ぶる月見子が相手では、ビビってしまって、逆らう気も起こらない。
（ええと、紅茶、どこだっけ、紅茶……）
さっき、どこかで見たんだけどな、と陽見子はも

たもたと捜す。
ティーカップのセットは最初に荷物から出てきたから、もうちゃんと洗って、食器棚に並べてあるので問題ないのだが、紅茶とコーヒー豆の缶はどこに出しただろう……。
（……もうっ！　早く、片付かないかなぁ……）
陽見子は、溜め息をつく。
部屋割りから家具をどこにどう置くかまで、ありとあらゆることで姉たちが争うので、いい加減、陽見子はうんざりもし、疲れてもいた。
（あたし、受験生なのになぁ。少し、考慮してもらえないかなぁ。来週、模試があるのに）
デル単の英単語のひとつも覚えたいところなのに。こんなところで食器を洗ってないで、早く、参考書を全部、荷物から出してしまいたい。でも、ここで自分の部屋の片付けでも始めようものなら、長姉の月見子がさらにキレるのは目に見えている。
「陽見ちゃん。これ」
星見子が、散乱している床の上の物の中から紅茶の缶を選り分けて、ひょいと渡してくれた。
「あ、サンキュ」
やっと目的の物がみつかって、陽見子はホッとする。
月見お姉ちゃんと、星見お姉ちゃんと、いざとなったら、どっちの方が頼りになるかな、と陽見子は考えてみた。
（性格的には星見お姉ちゃんの方が好きだけど、月見お姉ちゃんは高給取りで、お金、持ってるもンなぁ――）
月見子が勤めている財閥系の会社、丸菱リースは、名前こそダサいが、不況に強い手堅い安定企業で、給料もボーナスも減法、良いらしい。
（あーあ……）
お母さんさえいれば、こんなこと、考えないでもいいのに、と陽見子は思う。
（お母さん……）
帰ってきてくれないかなぁ、と陽見子は、もう、この一月（ひとつき）というもの、何度も考えていることを、ま

たしても頭の中で繰り返した。
涙が、つい、目に滲んでくる。
（お母さん――どこへ行っちゃったの？　帰ってきてよお……）
そう、千野家の主婦にして家長、女手ひとつで三人の姉妹を育てあげた、彼女たちの母が失踪してから、すでに一月が経過しようとしていた。

2

千野月見子。二十五歳。入社五年目のベテランOL。独身。千野家の長女。
千野星見子。もうすぐ二十二歳。一浪して、成京薬科大学に入ったので、ただいま、大学三年。薬剤師と臨床検査医の資格を取ろうと奮闘中。もちろん、独身だが、彼氏アリ。千野家の次女。
千野陽見子。十七歳。高校三年の受験生。同級生にボーイフレンドはいるが、これももちろん、独身。千野家の末っ娘である。

ごく平凡な、この千野家の三姉妹の生活に異変が起こったのは、この五月のことであった。
ある日のこと。
月見子が仕事が終わって、同僚と軽く飲んで帰ってくると、玄関に飛び出してきた陽見子は泣きそうな顔で、こう、わめいた。
「お姉ちゃんっっ！　お母さんがいなくなっちゃった！　それであたしたち、この家を出なきゃいけないってっ……！」
「何なの、陽見子？」
目を白黒させる月見子に、陽見子は走り書きの便箋を突き付けた。
書いてあるのは、母の筆跡だった。
『いろいろ訳があって、この家はお母さんが売りました。ここにある書類の住所のマンションに引越しなさい。手続きは全部してあって、敷金、礼金、二年分の家賃はもう払ってあります。封筒の中のお金は、引越しの運送費用と当座の生活費として使いなさい。月見子、星見子、陽

見子、それぞれに貯金通帳を作っておきました。そのお金は、自由に使いなさい。大切にね。学費については、坂口の叔父さんに相談しなさい。そのための資金を預けてあります。では、仲良く、元気でね。お母さんは行かなければなりません。

母より』

月見子は、口をぽかんと開けた。

とっさのことで、一度くらい手紙の文面を読んだところで、これがどういうことなのかはまるでわからなかった。

「お母さんは？」

月見子はまぬけなことを聞き、陽見子はヒステリーを起こしながら、わめいた。

「だ・か・らっ！　……いないのっ！」

「どういうことなの？」

「知らないっ！　月見お姉ちゃん、なんとかしてよっ！　学校から帰ってきたら、この便箋と、いろんなものが入った封筒が置いてあったの！　もう、星見お姉ちゃんも帰ってこないし、あたし、まだ、晩御飯も食べてないんだからねっ！」

「晩御飯は？　お母さん、用意してないの？」

「……シチュー」

泣きながら、陽見子はくやしそうに答えた。

月見子が泣きべそをかく陽見子をなだめつつ、シチューを温めて一緒につきあって食べていると、星見子が帰ってきた。大学の仲間と飲んできて、こちらもホロ酔いだった。

「何、これ？　どういう冗談かしらね？」

やけにリアリティある書類の数々を見ながら、星見子も首をひねった。

星見子も自分用にシチューをよそってきたので、三人姉妹は母親が残していった夕飯を食べつつ、三人して首をひねった。

いつもの、星型に切ったニンジンが入っている鶏肉のクリームシチューだった。

いつもの、母が作った料理の味だった。

三人ともが狐につままれた状態でその夜は過ぎた

が、目が覚めてもそれは夢では終わらなかった。

母は本当に家を売り払い、娘たちにはそれぞれに二百万円ずつの貯金通帳を残して、失踪していた。二十五歳を頭に、下は十七歳まで育っている三姉妹を置いて、五十歳近い女がひとり、失踪したからといって、警察はあまり親身になって捜してはくれなかった。

「警察なんて、いい加減よねっ！」

警察に電話し、母の失踪届けを出しに行った月見子は、ぷりぷりと怒って帰ってきた。

「男がいたんじゃないかとか、借金があったんじゃないか、とかそういうことを言うの！　お母さんに限って、そんなはず、ないのに！」

「まぁまぁ、お姉ちゃん。怒ったってしょーがないじゃない。世間的に見れば、そんなふうにしか見えないでしょうしねぇ」

星見子は長姉をなだめた。月見子は、星見子を睨む。

母がつねづね、あんたは男に生まれてくれていれば良かったと言っていた星見子は、友達に〝スーパードライ〟と称されるほどに沈着冷静、何ごとにも動じない、さっぱりとした性格をしている。内弁慶で、外では優等生で大人しい癖に、家の中では威張っている月見子にはこの星見子の性格がどうも気に触わるらしく、何かというと喧嘩になる。

「でも、お母さん――家を売ったお金、何に使ったんだろ」

とりあえず、今後のことなど話し合うため、ダイニングのテーブルに三人して顔を突き合わせているうちに、ふと、星見子がつぶやいた。

月見子も口をつぐむ。

「お母さん、会社の方はどうなってるワケ？　そういうこと、いい加減にする人じゃないと思うけど――」

「三月の半ばで、退職していたみたい……」

星見子の問いに、月見子は重い口を開いた。

「さ……三月っ！」
陽見子が、すっとんきょうな声を上げた。
「ヤだ、じゃ、だって――二ケ月も前から……？」
「そういうことになるわね、陽見子。そういえば、この頃、よく休んでいるな、とは思ってたんだけど。風邪がしつこくて治らないって言ってたから、信じていたのよね」
「お母さん、あたしたちに何か隠していたことがあったのは確かみたいね」
星見子はあくまでも冷静につぶやいた。
「この家、幾らくらいで売れたの？　お姉ちゃん、昼間、この家を買った不動産屋さんにも行ったんでしょ？　何て言ってた？」
「詳しくは教えてくれなかったんだけど……七千万円くらい――みたい」
陽見子は目を丸くして、またしてもすっとんきょうな声を上げた。
「ななせんまんえんっ……！」
「――ていうことは、お母さん、退職金と合わせて、八千万円くらいを持って姿をくらましたってワケね」
星見子は、あくまでも冷静な声で現状分析を続けた。
「何か犯罪に巻き込まれたんじゃなければ、別に、お金を何に使おうとお母さんの勝手だとは思うけど」
星見子の言葉に、月見子と、それに陽見子までもが、反射的にうなずいた。
保険会社に勤めて、女手ひとつで三人の姉妹を育ててくれた母を、娘たちは全面的に信頼していた。その点では、三人の娘たちの心情は一致していた。
「まぁ、なんといっても、心配なのはお母さん自身のことね。本当に……大丈夫なのかしら。こんなのっておかしいし、何か妙なことに巻き込まれている可能性が皆無ってわけじゃないじゃない？」
「妙なことって？」
お茶を啜りながら、月見子は問い返す。
「だから……つまり、詐欺、とか、アブない関係の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com